幹事長日誌
（平成28年１月１日～12月31日）

川口博史

平成28年

１月１日（金）　：晴れのち曇り　元旦

大みそかに一杯やりつつ遅くまで起きていたため、目が覚めたらすでに明るかった！

喪中のため、お正月はあまりお祝いしてはいけない身なのだが、昼過ぎに親族が本家に集結し、新しい家族も紹介された。今年１年、健やかに楽しく仕事をしたいものだ、と念じつつまた一杯。

１月14日（木）　：晴れ　於／ホテル横浜キャメロットジャパン

第11回神奈川フットケア研究会　（共催：マルホ株式会社）

特別講演Ⅰ「足育研究会について　～『あしよわ症候群』とは～」

東京医科歯科大学大学院皮膚科　今井亜希子

特別講演Ⅱ「皮膚潰瘍の色々　～褥瘡の最新エビデンスを交えて～」

聖マリアンナ医科大学皮膚科　門野岳史

診療が終わらず途中からの出席であったが、日常ありふれた疾患である陥入爪、胼胝、鶏眼などもその成因をよく考えると、歩き方、膝、さらには骨盤や上肢の動きなどまで考えなければならないとのこと。鶏眼をただ削るだけの日常診療を反省。門野先生は、褥瘡をはじめとする皮膚潰瘍も原因がさまざまであり、それぞれ基本的な対応の仕方が異なること、また最近の褥瘡ガイドラインなどの解説も交えながら、薬剤の使い方、また欧米などとの方針の相違点などを分かりやすくお話しいただいた。みんなで「あしよわバイバイダンス♪」を踊らなくては！　参加者は医師68名、コメディ 91名の合計159名。

１月16日（土）　：晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ

常任幹事会　（共催：塩野義製薬株式会社・ガルデルマ株式会社）

今回は特別講演に京都の谷岡未樹先生においでいただき、「ざそう治療の最前線」としてニキビに関する最新の話題をお話しいただいた。豊富な臨床経験と、さらにガイドライン作成にもかかわっていた谷岡先生ならではの講演であった。遠方からわざわざおいでいただきありがとうございました。会議では役員改選についてと50周年記念例会の相談が主であった。多くの先生にご出席いただき、楽しい記念例会にしたいものだ。

１月28日（木）　：晴れ　於／崎陽軒

広報・編集委員会

「神皮23号」の原稿に関する相談。神皮も少しずつ内容がリニューアルされて新しいコンテンツも掲載されるようだ。いい企画が出てきて、シリーズ化されるといいと思った。

２月13日（土）　：曇りのち雨　於／ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル

KANAGAWA PSORIASIS SEMINAR

（共催：レオ ファーマ株式会社・協和発酵キリン株式会社）

「尋常性乾癬の病態に迫る」　三重大学医学部皮膚科准教授　山中恵一

所用のため演者にご挨拶だけして失礼した。話の上手な山中先生なので、きっとわかりや

すい話だったことと思う。参加者65名。

3月2日（水）　：晴れ　於／新横浜プリンスホテル

健保委員会

今回の診療報酬改定では皮膚科関連の大きな変更点はないとのことで、伝達講習会は開催しないことになった。その他、150回例会でのQ&Aの相談をしたとのこと。

3月6日（日）　：曇りのち雨　於／関内新井ホール

神奈川県皮膚科医会第150回例会　（共催：科研製薬株式会社）

テーマ「皮疹からみる膠原病」　担当幹事：足立　真

ミニレクチャー「爪白癬の治療戦略」　帝京大学医学部附属溝口病院皮膚科教授　清　佳浩

講演１「皮膚筋炎 ～皮疹のみかたと診断のポイント」　筑波大学皮膚科教授　藤本　学

講演２「膠原病の皮膚潰瘍 ～臨床症状と治療について」

熊本大学大学院生命科学研究部皮膚病態治療再建学分野教授　尹　浩信

清先生は、近年抗真菌外用薬が広く使えるようになってきているが、毎度のことながら正しい臨床診断がなされることがまずは一番重要であるとのこと。自分としても抗真菌外用薬はなかなかいい手ごたえを持っているので、抗真菌薬の内服ができない患者さんにはありがたいことである。藤本先生は、近年特に皮膚筋炎に対して有用な抗体検査法が出てきていることを踏まえて、その検査値と臨床症状との関連性などについて明快にご講演いただいた。尹先生は主に強皮症の臨床症状と各種抗体検査との関連性、まだ根治させる治療法はないものの、進行を抑えるための治療薬についてわかりやすくお話しいただいた。個人的に苦手分野であるので大変参考になった。お忙しいスケジュールの中、横浜まで来ていただいた演者の先生方に感謝いたします。参加者はほぼ出席ハガキ通りの168名、足立先生お疲れ様でした。

3月9日（水）　：曇りのち雨　於／横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ

神奈川県皮膚科医会第151回例会準備会（企画委員会）

第151回の記念例会もこれからプログラムの印刷、来賓のご招待などの最終段階になってきた。みんなで楽しい会にしたいものだ。第152回以降も順調にテーマ、演者が決まってきている。共催もほぼ３年先まで埋まっており、本当にありがたいことだ。

4月16日（土）　：曇りのち晴れ　於／ホテルプラム横浜

神奈川県皮膚科医会学術講演会　（共催：株式会社ポーラ ファルマ）

講演１「ガイドラインにおける配合剤の位置付け」　虎の門病院皮膚科部長　林　伸和

講演２「最新のニキビ治療　配合剤の使い方のコツ」

東京医科大学皮膚科兼任教授　乃木田俊辰

いろいろあって開催日の変更などバタバタしたが、無事開催にたどりつけた講演会であった。近年ようやく諸外国並になってきた我が国のニキビ治療薬、改定されたガイドラインでは、それら新薬の位置付けに加えて、急性期と維持期で治療戦略が異なっているのだが、そのあたりの解説と、実際の使い方について、臨床経験の豊富なお二人の先生にお話しいただいた。開業するとニキビ患者は毎日たくさん来るので、明日からの診療に直結する内容だった。参加者73名。

5月11日（水）　：雨のち曇り　於／横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ

会計監査

金丸哲山、日下部芳志両監事に、医会の運営についてご指導いただいた。毎年のことだが、だんだん厳しくなる財政事情の中で、会員の日常診療に役立つ情報をいかに発信していくか、まだまだ努力しなければならない。

5月18日（水）　：曇りのち晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ

神奈川県皮膚科医会50周年記念例会準備会

最終確認のため、ホテルの高野孝紀さんも交えて相談。幹事会の段取りや、写真撮影、合唱の準備など、プログラムには見えてこない細かい相談事がまだまだ出てくる。一つずつ煮詰めていかなくては。

5月19日（木）　：晴れのち曇り　於／けいゆう病院会議室

広報・編集委員会

「神皮23号」の校正などを相談。今号も充実した内容になりそうだが、来年発行の24号は50周年特集を組むので、いつもの神皮とは少し異なる内容になりそうだとのこと。広告や原稿を取りまとめてくれた河原由恵委員長はじめ委員の先生方、お疲れ様でした。

5月21日（土）　：晴れのち雨　於／横浜ベイホテル東急

常任幹事会

特別講演は河原由恵先生の「当院における乾癬治療の実際」。乾癬は近年、生物学的製剤など治療の選択肢が増えたものの、やはり基本となる外用療法や光線療法が必要不可欠。ただ、通院の都合などいろいろ制約がある中での苦労、工夫などをお話しいただいた。

常任幹事会では、決算予算報告や、50周年記念例会の最後の打ち合わせなど盛りだくさんであった。またこの会をもって増田智栄子副会長が勇退されることとなった。医会の執行部に12年もいらしたとのことで、本当に長い間、医会のためにありがとうございました。今週は会議が続き、浅井、増田副会長と河原先生とは３日間、夕食を共にすることになった。家族並み、いやそれ以上か（笑）。

6月10日（金）　：曇りのち晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ

神奈川県皮膚科医会50周年記念例会打ち合わせ

鎌田英明会長、河原由恵先生、齊藤典充先生達と最終打ち合わせ。祝賀会の座席や合唱の打ち合わせなど、表には出てこないが相談することがまだまだたくさんある。もう時間も迫っているので、今後はメールでのやり取りになることと思われる。あと３週間だ！　自分は総会の準備に専念しなければ。

6月25日（土）　：曇り一時雨　於／ TKPガーデンシティ横浜

第65回神奈川医真菌研究会

レーザー治療学会表敬訪問のため欠席した。今回は実習もあったためか85名と盛況であった。懇親会の準備でハプニングがあったようだが、堀内先生お疲れ様でした。

6月29日（水）　：雨のち曇り　於／横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ

健保委員会

7月３日（日）　：曇り時々晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ

神奈川県皮膚科医会第151回例会・50周年記念例会

総会の議長は石井則久先生にお願いし、無事終了。これからの２年も鎌田英明会長体制で運営することとなった。袋秀平新副会長や、澤田俊一、小野田雅仁の新常任幹事の先生方、どうぞよろしくお願いします。

記念例会は栗原誠一顧問による記念講演で始まったが、特にこの10年間、医会の中心にいらして、医会を最も知る栗原顧問ならではのいいお話であった。皮膚科専門医試験解説では、高須博先生の提示してくれた設問が的確でまた難しく、専門医以前の医師国家試験問題まで踏み込んで解説してくれた。難しい！

特別講演では内山真先生（日本大学医学部精神医学系主任教授）の「臨床に役立つ睡眠学」の話は、快適な睡眠を維持するためには、年代ごとに気を付ける点が異なるとのことで、

最近漁師並みに早寝早起きの自分も、気を付ける点があるようだ。酒井シズ先生（順天堂大学医学部医史学研究室特任教授・名誉教授）の「皮膚科学の先駆者たち」では、近代、特に明治のころはドイツへ留学して西洋医学を学んで帰ってきた先生達が、日本の皮膚科学を開拓していったこと、また泌尿器科からの独立の経緯など、皮膚科の歴史を解説してくださった。横浜市立大学にも医史学教室があったと聞き、習ったような習わなかったような、うろ覚えの自分が恥ずかしかった。プレゼン資料に少しトラブルがあり、少し早めの終了となったが、有意義な講演であった。急きょタクシーで順天堂に向かってくれた山田裕道先生、ありがとうございました。

記念祝賀会では来賓も多数出席してくださり、50年継続会員表彰では、出席された先生方が壇上に上がり、50年間会に参加してくださっていることに改めて感激した。そして浅井俊弥先生の渾身のスライドショーや、神皮混声合唱団の歌声披露など、医会ならではの企画で大いに楽しむことができた。改めて医会のパワー、個々の先生たちのタレントに脱帽である。無芸大食（大飲？）の私はなにも役には立っていないが、取りまとめ役に徹することで医会の運営に少しでも貢献できればと思う。次の２年を頑張ろうという気持ちになった１日であった。参加者202名。

７月７日（木）　：晴れのち曇り　於／横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ

神奈川県皮膚科医会第152回例会準備会

第151回の反省と第152回以降の例会の企画。企画委員は今期も前期と同じメンバーで運営することとなった。仕事が遅くなったため、車で行ったので反省会はなく、久々の休肝日となった。

８月６日（土）　：曇りのち晴れ　於／横浜ベイホテル東急

神奈川県皮膚科医会特別講演会　（共催：マルホ株式会社）

講演１「乾癬の病態と活性型ビタミンD3」

日本大学医学部板橋病院皮膚科准教授　藤田英樹

講演２「マーデュオックス軟膏の効果を分解して考える」

帝京大学医学部附属病院皮膚科主任教授　多田弥生

私用で欠席したが、情報交換会は袋秀平新副会長の乾杯の音頭で始まり、齊藤典充副幹事長の中締めであったとのこと。参加者62名。

９月12日（月）　：曇りのち雨

事務局の瀬尾さんが怪我をしたとの情報が入る。抜けて初めてわかる瀬尾さんのありがたさ。１日も早い回復を祈ります。

９月14日（水）　：雨のち曇り　於／ AP横浜駅西口会議室

イベント委員会

クラシエの漢方薬の説明のあと、今年の「いい皮膚の日」イベントについての打ち合わせ。今年は齊藤典充副幹事長が欠席とのことで、司会を若い先生にお願いすることになった。よろしくお願いします。

10月６日（木）　：曇りのち晴れ　於／横浜国際ホテル

皮膚の健康委員会・第５回横浜東部小児皮膚フォーラム　（共催：マルホ株式会社）

「学校医として皮膚科医の役割　～様々な子どものなやみ～ アトピー性皮膚炎・水イボ等」

岡村皮フ科医院院長　岡村理栄子

岡村先生の話では、学校医、これは行政の関係もあり現状では我々はそう簡単には入り込めない。しかしながら子どもたちにとって、健やかな学校生活を送るうえでの皮膚疾患とのかかわり方について、先生の理想と現実についてお話しいただいた。参加者27名。

10月15日（土）　：晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ

常任幹事会

「最近のざ瘡外用薬についてあれこれ」　　こばやし皮ふ科クリニック院長　小林誠一郎

「メリケントキンソウによる皮膚障害の集団発生例」

ふくろ皮膚科クリニック院長　袋　秀平

小林先生はアダパレンの刺激感の耐用性に関して、基礎的なデータをもとに類推された。また過酸化ベンゾイルの刺激性に関しては、油性のものを併用するとよいとのことであった。袋先生の報告は、一般人の間ではすでに有名？になっているメリケントキンソウの皮膚症状について、我々皮膚科医にも啓蒙してくれるいい報告であった。身近なところにも生えているので、我々開業医は十分注意する必要がありそうだ。

常任幹事会は、３期目の鎌田体制最初の会議であったが、新常任幹事お二人が身内のご不幸のため欠席であった。これからの２年間よろしくお願いします。医会ならではの独自研究もまた挑戦してみたいので、ユニークで我々ならではのテーマを見つけていきたいものだ。

11月３日（木）　：晴れ一時雨　於／横浜情報文化センター 情文ホール

「皮膚の日」イベント

講演「成人に多い果物・野菜の食物アレルギー　～最新のアレルゲン解析が解き明かす花粉症との不思議なからくり～」　　横須賀市立うわまち病院皮膚科部長　松倉節子

日常しばしば経験するOASについて、花粉との交差反応などを一般の聴衆向けにわかりやすく解説していただいた。Q&Aやお肌のトラブル相談コーナーも好評であった。初参加、初司会の渡部秀憲先生も、堂々としたものでうまく進行してくれた。ありがとうございます。一般参加者130名、総参加者201名。

11月８日（火）　：曇りのち雨

医会の名誉会員で、横浜市立大学の大先輩である加藤安彦先生の訃報が届く。病気療養中であったが、状態が急変したとのことで、連絡を聞いた我々もびっくりした。謹んでご冥福をお祈りする。

11月19日（土）　：雨のち曇り　於／横浜ベイホテル東急

第26回Joy Derma Club

参加者63名。

11月27日（日）　：雨

健保委員会

12月４日（日）　：曇りのち雨　於／横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ

神奈川県皮膚科医会第152回例会　（共催：田辺三菱製薬株式会社）

テーマ「顔面の紅斑と酒皶」　　担当幹事：菅　千束

ミニレクチャー「抗ヒスタミン薬の継続服用のコツ　～蕁麻疹の治療戦略～」

日本大学医学部皮膚科学系皮膚科学分野助教　葉山惟大

講演１「成人顔面の赤い皮疹の診療」　　自治医科大学皮膚科准教授　村田　哲

講演２「The 酒皶：病態と治療の話題 2016」

東北大学大学院医学系研究科皮膚科学准教授　山﨑研志

20%の人は経験したことがある、そして日常当たり前のように診療している蕁麻疹であるが、蕁麻疹の痒みや発疹は、労働生産性をかなり低下させているとのことで、最近使えるようになった新規抗ヒスタミン薬が、難治例の治療に寄与できるといいものだ。また村田、山﨑先生からは、顔面の皮疹を診た時に、それぞれの生活スタイルから接触原、刺激にな

るものを考え、必要ならばパッチテストなどで、原因物質を明らかにすることが重要である。またケーソンCGのように、使用基準の変更に伴い、これから増加することが懸念される物質もあるので、我々は適切な情報を常にアップデートしなくてはならない。酒皶は現在日本においては、適応のある薬剤がないことから治療に難渋するが、薬剤、スキンケア用品などである程度効果が期待できるものもあるので、それらをうまく使えれば、ある程度は症状の改善が期待できるとのこと。また欧米での治療の現状などについても、わかりやすくお話しいただいた。顔面の紅斑、酒皶は毎日診療に困っている例が多いので、会員の関心が高かったのであろう、今回も多数の出席があった。これも菅担当幹事、企画委員会での議論の成果であろう。あいにく私は先に帰ってしまったが、有志で菅担当幹事の慰労会を開いたとのことで、菅先生大変お疲れ様でした。参加者180名、託児は６名の利用があった。

12月７日（水）　：曇りのち晴れ　於／横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ

神奈川県皮膚科医会第153回例会準備委員会

第152回の反省と、第153回以降の例会の企画。第153回のウイルス性皮膚疾患、第154回のデルマドロームも、それ以降のテーマも大変興味深いものが続く。大いに議論して、会員の診療の役に立つ例会にしたいものだ。

12月29日（木）　：曇りのち晴れ

今日で今年の仕事は終了。今年１年、大きなトラブルなく診療することができたのは、一緒に仕事をしているスタッフたちの頑張りのおかげであり、ありがたいことである。身近な人たちが、けがをしたり病気になったり、また亡くなったりしているので、これからも健康には留意しなくては、と言いつつ、毎日の晩酌は欠かせない（笑）。大ダイは、春に釣れた5.2kgが最大だったろうか、水曜日は荒天で、出船取りやめが多かった気がしてならない。数えてみたら19回マダイ狙いで船に乗り、30枚釣りあげていたが、実は何度もボウズを食らっている。まだまだ修行が足りないようだ。来年は早速釣り初めに行くので、よい釣果であることを。ではこれから恒例の船頭たちとの納会に行ってきます！

委員会報告

学術委員会だより

高須　博

学術委員会の活動を報告します。平成28年度は、会員の先生方が「顔面ざ瘡」に対してどの様な治療をしているかについてのアンケート調査を行いました。内容は、

１．治療（内服、外用）について
２．耐性菌について
３．外用剤の副作用対策について
４．維持療法について
５．生活指導について

６．ざ瘡治療の問題点についてです。

アンケートを正会員535名に郵送し、回答者は206名でした。ご協力ありがとうございました。この結果は、平成29年４月に神戸で行われる第33回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会にて報告予定です。

今後とも会員の皆様には、学術委員会の事業に継続的な御理解と御協力を頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

委員会報告

Joy Derma Clubだより

山川有子

Joy Derma Club（JDC）は、発足当時から年に２回の講演会を行っており、現在は神奈川県皮膚科医会の正式な委員会として活動しております。平成28年度も女性ならではの視点を生かし、委員が勉強したいと思うテーマに基づいて講師の先生をお招きしました。学会とは一味違うJDC講演会に、多くの女性医師が参加してくださることに、委員一同、感謝しております。

●第25回Joy Derma Club

日　時：平成28年５月26日（木）

会　場：ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル

共　催：クラシエ薬品株式会社

参加者：75名

【ミニレクチャー】

診療に役立つスマートフォンの使い方　おもにiPhoneを用いて

川崎市立川崎病院整形外科／株式会社LDP代表　西田有正

スマートフォンは始めからスマートではありません。

スポーツや他の習い事と同じように、コツをつかんで反復練習をすることで、山のような資料をすっきり格納して手ぶらで臨床現場や学会に臨むことができるようになります。スマートフォンひとつでそれが叶うとしたら、素晴らしいと思いませんか？

このためのステップは、以下の３つです。

①パソコンとスマートフォンの設定とその操作練習

②自宅でデータ化するための環境設定とその操作練習

③パソコンとスマートフォンを常に整理整頓しておく習慣作り

僕の印象では、これが実践できているのは若手の先生の中でも５％くらいです（つまり、年齢に関係なく、ほとんどの先生は使いこなせていません）。

この３つのステップをマスターしていただくための懇切丁寧なサービスを、キッティングサービスと呼んで、レッスンとして提供しています。

JDC会員の先生方にも数人すでにキッティングレッスンを受けて頂いており、メキメキと上達されています。

ご興味ある方は是非、下記までメールにてご連絡ください！
西田有正　yushonishida@ldp.co.jp

【特別講演】

視点が変わる漢方医学　　野本真由美スキンケアクリニック院長　野本真由美

「医師が患者さんを治す」という視点で診療すると、時につまずくことがある。そんなとき、「患者さんの治る力を高める」漢方医学がある。「どの漢方薬が効くか、どのくらいで効果がでるか」という視点から、「食事も漢方薬も、毎日の自分をつくっている」という視点に変わる。漢方薬は、豊富な栄養素、高い抗酸化力、腸内環境を整える作用などがあり、皮膚疾患のみならず全身に効果が期待できる。日本の伝統医学を見直す機会になればと思う。

西田有正先生からは、スマートフォンは始めからスマートではなく、一工夫加える事により山の様な資料をすっきり格納する事ができることをご教示頂き、よりスマートなスマートフォンにするための技をご紹介頂きました。

野本真由美先生からは、ざ瘡治療を中心とした多くの臨床写真を供覧しながら、陰陽五行説などの東洋医学的な考え方、捉え方を示される一方で、漢方薬の内服前後でd－ROMs値（酸化ストレス値）とBAP値（抗酸化力）を提示され、漢方薬には不思議な抗酸化力があることを示されました。また、陰陽五行説、五臓の概念に基づき、本治と表治がある事、具体的には脾（消化管）が肺（皮膚、呼吸器）の働きを助けるため、胃腸を整える六君子湯（りっくんしとう）などの本治となる漢方を用いることによって、十味敗毒湯（じゅうみはいどくとう）などの表治の働きを助ける事があることや、慢性疾患は「気」の異常を伴っていることが多いため、気を補う補中益気湯（ほちゅうえっきとう）などが有効とされているが、補中益気湯にはUVBをブロックし、カタラーゼ活性を高める等の生体防御作用もある等のお話を伺いました。

（文責：羽尾貴子）

●第26回Joy Derma Club

日　時：平成28年11月19日（土）
会　場：横浜ベイホテル東急
共　催：ポーラ ファルマ株式会社
参加者：63名

【講演１】

小児の感染性皮膚疾患　～真菌症を含めて～　　神奈川県立こども医療センター皮膚科部長　馬場直子

私のいる小児病院では、白血病や小児がんで化学療法などによる免疫抑制状態の患児も多く、皮膚に感染症が疑われるような発疹がある患児がいると大騒ぎとなり、すぐさま皮膚科併診となる。

小児にみられるウイルス性皮膚疾患では、伝染性軟属腫、単純ヘルペスや帯状疱疹、カポジー水痘様発疹症の頻度が高く、急性発疹症として現れるのは、手足口病、伝染性紅斑、突発性発疹、水痘、麻疹、風疹などがある。これらの感染性疾患を、皮疹の形態と分布、発熱との関係、随伴症状などから、できる限り検査結果を見る前に診断することが皮膚科医の存在意義であり、感染の拡大を防ぐために求められる。

ウイルス感染症に関する最近の話題として、平成23（2011）年と平成25（2013）年に近年になく大流行し、いわゆる再興性ウイルス感染症として注目された手足口病は、平成27（2015）年にもまた大流行し、ここ５年間は隔年現象となっている。近年の流行の主体はコクサッキー A6ウイルスによるもので、水疱が大型で多彩な形態を示し、手掌足底よりもむしろ腕や脚に好発する、後に手足の爪が脱落するなど従来の手足口病とは異なる臨床像を示した。

伝染性紅斑は平成23年に近年にない大流行がみられ、平成27年もまたそれに迫る多数の罹患者がみられた。伝染性紅斑は小児では特有なリンゴ病の臨床像を示しあまり診断に迷わないが、成人では臨床像が多彩で、重篤な合併症をきたすことがあるため注意が必要である。

特に妊婦が感染すると胎内感染により、胎児が重度の貧血、心不全を発症して、胎児水腫となり死亡することがあるため、患者を妊婦に近づけない注意が重要である。ワクチンはなく、確実な予防手段はなく、発疹が出たときにはもう感染力はないので、隔離する必要はないので、学校に行ってもよい。いったん消えた発疹が、日光に当たったり、興奮したり、入浴後に再び出てくることがあるが、再発ではない。血清学的診断は紅斑が出ている妊婦にしか保険適応がない。

ヒトパレコウイルスは、ピコルナウイルス族の中で新しく認識されたウイルスであり、HPeV3型は平成16（2004）年に日本から初めて報告された血清型で、他の血清型より重症化しやすい。症状は、発熱、頻脈、多呼吸、末梢のチアノーゼの他、発熱１～５日後に手掌、足底に紅斑が出現する割合が80％をしめる。HPeV3型は、エンテロウイルスと並んで新生児、早期乳児の発熱、敗血症の鑑別に入れるべき疾患であり、その診断の手がかりとなる所見として、手掌、足底の紅斑が有用なので皮膚科医も知っておくべきである。

細菌感染症で最も多いのが伝染性膿痂疹である。近年、伝染性膿痂疹やブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群から分離される起因菌の薬剤耐性率が高くなっている。メチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）の分離率が高くなってきているが、必ずしも多剤耐性を示す院内感染型MRSAというわけではなく、ある程度感受性も保たれている市中感染型MRSAがほとんどである。特に、SSSSの起因菌の中で市中感染型MRSAの割合が上昇傾向にあり、報告によって50～80％を占め、通常の黄色ブ菌に効くβ-ラクタム系抗菌薬に対して耐性を示す検査結果が出ることが問題視されている。治療としては、病変の総面積が患児の手掌大以下の小範囲である場合は、患部を石けんの泡で擦らず丁寧に洗い、ナジフロキサシンなどの抗菌外用薬を塗り、ガーゼ・包帯で覆うか、ボチシートを重層する、局所処置だけでも治ることがほとんどである。面積が広く、またアトピー性皮膚炎に合併している場合は、まずMRSAをターゲットに、小児用のβ-ラクタム系薬の広域スペクトラムの内服を開始し、細菌培養しておく。３～４日後に再診し、軽快していれば痂皮がなくなるまで２～３日抗菌薬を続けて中止、不変ないし悪化していれば薬剤感受性結果を見て、感受性のあるホスミシンや、８歳以上であればミノマイシンに変更または併用とする。連鎖球菌性膿痂疹が疑われた場合には、黄色ブ菌との混合感染を想定して、どちらにも効くβ-ラクタマーゼ阻害薬配合のペニシリン系薬、ペネム系薬、セフェム系薬を選択する。

最後に、真菌感染症で多いのは、カンジダ症、白癬、癜風である。これらの特徴的な臨床像と診断、治療について私見を述べた。

小児の感染症に関しては学校での感染が広がることで多くの児童を巻き込み、学校教育に支障をきたす可能性があることから、学校保健安全法が施行されている。その第三種の中に、伝染性膿痂疹、伝染性軟属腫、アタマジラミ、手足口病、伝染性紅斑などの皮膚症状をきたす学校感染症が含まれていて、出席停止の必要性やプール授業の可否など、状況に応じて医師の診断や判断が求められることがある。日本小児皮膚科学会、日本臨床皮膚科医会、日本皮膚科学会ではこれらの学校感染症に関する統一見解をそれぞれの学会ホームページ上で公開している。これらの皮膚感染症はいずれも人から人へ、直接接触によって感染しやすいものであるため、診断をつけたら治療と共に、家族や他の子どもに移さないような対策や保護者や保育士への注意が必要である。

【講演２】

脳が育つよりよい環境　　国際医療福祉大学副学長・国際医療福祉大学病院病院長　桃井眞里子

人工知能の情報が巷にあふれ、脳科学は21世紀の一大領域であるが、脳の発達に関しては、まだ未知な部分が大きい。神経細胞数は出生後には増えないと言われてきたが、出生後も一部では結構新生していることが明らかにされつつあり、脳は、従来考えられたよりも、より一層可塑性に富むことがわかってきた。小児期は脳が成熟する上で重要な時期だが、適切な社会生活に最も重要な実行機能や抑制機能を果たす前頭連合野の成熟は20歳前後であり、一般に考えられているよりも、脳の成熟には時間がかかることも理解されつつある。この

時間軸の中で、遺伝子以外の要因が多様に作動して、脳の遺伝子発現が決定され、人間の基本的心理や行動が決まってくる。50年以上を経た知能の変化においても、環境の影響は少なくないことが判明している。恐怖、不安などの情動の基本的パターンに必要な遺伝子の発現プロファイルは、小児期早期に決定されるために、小児期早期の環境、食事、睡眠、運動、成育環境等の全ては極めて重要だが、同時に、大脳辺縁系の成熟よりもその抑制の役割を果たす前頭連合野の成熟が遅いために、思春期・青年期に、一見理解できない不安定な情動、心理、行動が生じると考えられる。

機能性神経症状と言われる多様な症状を呈するのも、思春期・青年期であり、前頭前野の成熟の遅れが、大人を戸惑わせる症状の背景にある。とくにこの時期を大きな破綻なく通り過ぎるには、小児期にどういう環境が望ましいのか、脳の発達の視点から考えてみる。

御二人の御講演は盛り沢山な情報でいっぱいでしたが、大変興味深く吸い込まれるような内容でした。あっという間のひとときでしたが、今回のJDCでも、参加者皆で楽しい時間を共有できた事と思います。

（文責：河野真純）

委員会報告

在宅医療委員会だより

小野田雅仁

在宅医療勉強会は都合により開催がありませんでした。

●第11回神奈川フットケア研究会

日　時：平成28年１月14日（木）19：00～21：00
会　場：ホテル横浜キャメロットジャパン５階　ジュビリーⅡ・Ⅲ
参加者：159名（医師68名、コメディカル91名）
共　催：マルホ株式会社
特別講演Ⅰ：「足育研究会について　～『あしよわ症候群』とは～」
講　　師：東京医科歯科大学大学院皮膚科　今井亜希子先生
特別講演Ⅱ：「皮膚潰瘍の色々　～褥瘡の最新エビデンスを交えて～」
講　　師：聖マリアンナ医科大学皮膚科　門野岳史先生

本研究会は、「足の疾患はまずは皮膚科医が診る、必要に応じて他科へ依頼する」というコンセプトを、皮膚科医も医療従事者も患者さんも共有すべきという考えから、平成18年に立ち上げられ、第11回目を迎えました。

今回は、東京医科歯科大学大学院皮膚科の今井亜希子先生と聖マリアンナ医科大学皮膚科の門野岳史先生をお招きし、足育研究会のことや皮膚潰瘍に関するトピックスや日常診療に役立つお話をお伺いすることができました。

【特別講演Ⅰ】

足育研究会について　～「あしよわ症候群」とは～　　東京医科歯科大学大学院皮膚科　今井亜希子先生

フットケアは、糖尿病性壊疽の下肢救済、そして転倒予防、全身運動機能の維持の観点からも重要であることが認識されている。しかし、フットケアには、足病の診察に加え、処置の施術、適切な靴の選択、運動指導など多岐にわたる要素が含まれるため、日常診療のなかで医療者が単独で行うことはむずかしい。2015年に発足した一般社団法人足育研究会は、医師、看護師、義肢装具士、運動療法士、靴店、フットケアセラピスト等、足に関連する多業種より構成され「赤ちゃんから100歳までぴんぴん歩ける社会作り」を目指し、足の健康に関する臨床研究、情報提供や広報活動を行っている。

また、当法人の提唱している「あしよわ症候群」について解説した。足の爪疾患や角化性病変、疼痛は下肢機能の低下と相関している。これら足病変が形成される背景には、変形や姿勢・歩行、生活習慣が関係しているため、これらに総合的にアプローチすることが重要である。

【特別講演Ⅱ】

皮膚潰瘍の色々　～褥瘡の最新エビデンスを交えて～　　聖マリアンナ医科大学皮膚科　門野岳史先生

皮膚潰瘍には様々な原因があり、物理的圧迫による褥瘡、物理的障害による熱傷、動脈性の血行障害によるPADや糖尿病性潰瘍、神経障害による糖尿病性潰瘍、静脈性の鬱血による下腿潰瘍、自己免疫による膠原病・血管炎に伴う皮膚潰瘍、リンパの鬱滞による後天性リンパ浮腫、感染による壊死性筋膜炎、また有棘細胞癌などの悪性腫瘍に大別できる。

皮膚潰瘍の治療にあたっては、潰瘍局所の治療と原因となる疾患に対する治療の二本立てで行う必要がある。例えば褥瘡においては褥瘡局所に対してはWound Bed Preparationが重要であり、創傷治癒を妨げる因子であるTIME、すなわちT：組織欠損や壊死組織、I：感染・炎症、M：滲出液の多寡、E：創辺縁の進展停止や折れ返り、について対策を講じることが必要である。また、褥瘡の原因となる原疾患のコントロール、栄養の改善、体圧分散も行わなければならない。これら様々な潰瘍に対する治療に関して、最新のエビデンスを交えながら概説した。

委員会報告

イベント委員会だより

小林誠一郎

●2016年度「皮膚の日」行事報告

11月12日は、いい皮膚の日として記念日協会に登録され、医師を中心に皮膚に関する啓蒙活動を続けております。例年同様、11月３日（木）に情報文化センター 情文ホールで、イベントを開催しました。

日　　時：平成28年11月３日（木）13：00 ～ 15：30

会　　場：情報文化センター 情文ホール

【プログラム】

司　　会：渡部秀憲先生

開会挨拶：神奈川県皮膚科医会会長　鎌田英明先生

講　　演：「成人に多い果物・野菜の食物アレルギー　～最新のアレルゲン解析が解き明かす花粉症との不思議なからくり～」

横須賀市立うわまち病院皮膚科部長　松倉節子先生

アレルギーの生じる仕組みと注意についてわかりやすく説明していただきました。

閉会挨拶：神奈川県皮膚科医会幹事長　川口博史先生

講演

皮膚のトラブルQ&Aコーナー：

イベント応募時に書いていただいた「皮膚科医への質問」について、司会の小林が以下の先生方に質問をして、答えていただきました。

担当の先生方：川上民裕先生、河原由恵先生、宮川俊一先生、三井純雪先生

質問コーナー

製品展示・紹介コーナーでの見学会

ホワイエでは　展示されているヘアケア・スキンケア製品の商品説明やサンプリングに大勢のお客様が熱心に説明を聞き、大盛況でした。無料肌年齢コーナーも30人と人気でした。

お肌のトラブル相談コーナー

前半・後半構成で行いました。

相談医の先生方：蒲原　毅先生、足立　真先生、増田智栄子先生、浅井俊弥先生、堀内義仁先生、川上民裕先生、井上奈津彦先生、澤田俊一先生、渡辺知雄先生、袋　秀平先生、宮川俊一先生、畑　康樹先生、宮本秀明先生、原　尚道先生、松岡晃弘先生

【参加者数】

来場者数：201名

相談者数：　30名

【協賛　展示・おみやげサンプリングメーカー】（９社）

アクセーヌ株式会社　大島椿株式会社　クラシエ薬品株式会社　ダイワボウノイ株式会社　常盤薬品工業株式会社　株式会ファンケル　株式会社ポーラ ファルマ　持田ヘルスケア株式会社　日本ロレアル株式会社

ホワイエのサンプリング展示

【賛助・労務提供メーカー】（26社）

エーザイ株式会社　大島椿株式会社　大塚製薬株式会社　科研製薬株式会社　グラクソ･スミスクライン株式会社　クラシエ薬品株式会社　グラファラボラトリーズ株式会　協和発酵キリン株式会社　佐藤製薬株式会社　サノフィ株式会社　塩野義製薬株式会社　株式会社スヴェンソン　大正富山医薬品株式会社　第一三共株式会社　大鵬薬品工業株式会社　田辺三菱製薬株式会社　中外製薬株式会社　株式会社ツムラ　鳥居薬品株式会社　バイエル薬品株式会社　株式会社ポーラ ファルマ　マルホ株式会社　持田製薬株式会　持田ヘルスケア株式会社　ヤンセンファーマ株式会社　ロート製薬株式会社

今年のテーマはアレルギーでした。特に食べ物のアレルギーは一般に関心が高く、皆さん熱心にメモしていらっしゃいました。前日が寒く、天候が心配でしたが、当日は晴天で盛況となりました。ご協力いただいた先生方、企業の方々に感謝申し上げます。

委員会報告

皮膚の健康委員会だより

澤田俊一

●第５回横浜東部小児皮膚フォーラム

日　時：平成28年10月６日（木）19時40分～

場　所：横浜国際ホテル３階「菊の間」

共　催：横浜東部小児皮膚フォーラム、マルホ株式会社

参加者：27名

【プログラム】

座　　長：澤田俊一

製品関連情報：マルホ株式会社

特別講演：「学校医として皮膚科医の役割　～様々な子どものなやみ～ アトピー性皮膚炎・水イボ等」

講　　師：岡村皮フ科医院院長　岡村理栄子先生

日本臨床皮膚科学会学校保健委員会の中心メンバーで、「おしゃれ障害」などの著書で知られている岡村先生のご講演は、以下に主なタイトルを挙げましたが、たいへん多岐にわたります。「学校保健委員会の主な活動」「学校感染症」「学校生活における紫外線対策」「学校におけるアトピー性皮膚炎の管理と指導」「学校現場における皮膚の応急処置―けが・きず・やけど―」「若年者の性行動の現実と問題点」「保健指導と健康相談」などで、どのテーマひとつだけでも１時間の講演では不足となる内容を、簡潔にまとめてお話し頂き、今後の「皮膚の健康委員会」活動の指標となる盛り沢山のご講演でした。

これからも当委員会として横浜東部小児皮膚フォーラムを開催していくことを予定しております。次回の第６回横浜東部小児皮膚フォーラムは、平成29年11月８日（水）に横浜国際ホテルでマルホ株式会社共催にて開催し、関東中央病院の鑑慎司先生にプロプラノールによる小児血管腫治療を含めた「小児のアザ治療」（仮題）についてご講演頂く予定です。

当委員会では、地域の保育園・幼稚園・学校への皮膚疾患やスキンケアに関する啓蒙活動推進を目的としています。神奈川学校保健研究会からの依頼を受け、平成29年１月14日（土）神奈川県予防医学協会健康管理室において、神奈川県下の養護教諭を対象として、森田美穂先生（横浜労災病院）により、アトピー性皮膚炎ならびに学校感染症について講演して頂きました。

また、保育園・幼稚園・学校から外傷（けが・火傷）治療依頼があった場合、対応可能な皮膚科医のマップ作成について、アンケート調査によりリストを作成することを企画しております。

地域において我々皮膚科医の果たせる活動について企画、アイデアなどがありましたら、委員会メンバーに是非お声かけ下さい。

委員会報告

企画委員会だより

畑　康樹

企画委員会は、例会の翌週水曜日か木曜日に11名の委員と会長・副会長・幹事長・副幹事長、更に決定している担当幹事数名が集まって、終わった例会の反省・改善点の検討と、次回以降の例会を如何に有意義なものにするかを話し合っています。

昨年度は第151回（平成28年７月３日）が神皮50周年記念会として、50周年の歴史を栗原誠一顧問に、皮膚科専門医試験を楽しもうと、実際の試験問題を高須博学術委員長に解説していただいたあとは、文化的講演として日本大学精神科教授の内山真先生に睡眠のお話を、順天堂大学名誉教授の酒井シヅ先生に医史学における皮膚病についてのお話をしていただき、そのあとの記念祝賀会も盛大に行われました。

第152回（平成28年12月４日）からは通常の例会に戻り、「顔面の紅斑と酒皶」（担当幹事：菅千束先生）、第153回（平成29年３月５日）が「小児に多いウイルス性皮膚疾患」（担当幹事：掛水夏恵先生）をテーマにして開催されました。それぞれの内容はこの神皮に掲載されていることと思いますが、ここ数年はどの例会も大入り満席状態が続いており、そろそろもっと大きな会場を用意する必要が出てきたのではという嬉しい悲鳴もちらほら聞こえてくるものの、何とか前方に設置した机の数を減らすなどして対応して頂いています。毎回目からうろこの、翌日からの診療に役立つ、充実した講演が続いていますが、気になるのはやはり若い先生方の参加が少ないことです。参加されればきっとご満足いただけるよう内容を練りに練ってお届けしておりますので、企画委員一同、皆様のお越しをお待ちしています。

今年度は第154回（平成29年７月２日）が「デルマドロームと痒疹」（担当幹事：高橋さなみ先生）、第155回（平成29年12月３日）が「知っておくべき外用療法」（担当幹事：高須　博先生）、第156回（平成30年３月４日）が「皮膚腫瘍（仮）」（担当幹事：加藤正幸先生）をそれぞれテーマにして開催を予定しています。どうぞご期待ください。

委員会報告

健保委員会だより

井上奈津彦

保険医及び保険医療機関は、療養担当規則・健康保険法等で規定されている保険診療のルールに則った診療を行う必要があります。この診療内容及び診療報酬請求に不正又は著しい不当があり、健康保険法に違反した場合には、行政処分として保険医療機関等の指定の取消及び保険医等の登録の取消を行ったうえで行政処分の内容を公表することになっています。さらに悪質なものに対しては医道審議会に諮られ、厚労省はその答申を受け行政処分を下します。

この３月に決定した行政処分のうち、

医業停止３年が４人　それぞれ危険ドラッグ、覚醒剤、強制わいせつ罪、診療報酬の不正詐取及び看護師に対する暴行・傷害。

医業停止２年　准看護師にレーザーで入墨除去や脱毛等医療行為をさせた。

医業停止１年　スピード違反（30キロ超過）、及び酒気帯び運転での人身事故。

医業停止４月は２人　ともに酒気帯び運転。

医業停止３月は３人　診療報酬の不正請求で保険医登録取り消し処分を受けた。

ドキッとする先生はいませんか。飲んだら乗るな。

平成28年度に健保委員会は下記の活動を行いました。

【委員会】

●平成28年度第１回健保委員会

日　時：平成28年６月29日（水）

議　題：①審査上の問題点に関して

●平成28度第２回健保委員会

日　時：平成28年11月30日（水）

議　題：①健保Q&Aの回答の検討

②審査上の問題点に関して

●平成28度第３回健保委員会

日　時：平成29年３月１日（水）

議　題：①健保Q&Aの回答の検討

②審査上の問題点に関して

委員会報告

広報・編集委員会だより

河原由恵

昨年は定期刊行の「神皮」第23号を発行いたしました。編集委員会は今のところ１月に内容や原稿依頼先を話し合う第１回が５月に、確認・校正を行う第２回が開催されています。平成28年も下記の日程で委員会を開催し、委員の先生方、執行部の先生方の活発なご議論のもと構成が決まっていきました。個人的な話で恐縮ですが、第23号の発行日は50周年記念例会の日であったため、実行委員の仕事、神皮合唱団（P42・P43をご参照ください）とあわせ３足（？）のわらじをはくこととなってしまい、正直なところ４～６月ごろの編集作業についての記憶は欠落しております。しかし、委員の各先生方の多大なるご協力により、例年のように問題なく発行の運びとなりました。いつもながらお忙しい中、原稿をお寄せくださる先生方、ならびに委員の先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、この原稿が掲載されている第24号は50周年記念例会についてのコーナーを設けています。そのため通常４、５施設程度お願いしている「シリーズ・病院」「シリーズ・開業」のコーナー他、縮小となっているページがあること、ご理解いただければ幸いです。

【平成28年の活動報告】

日　時：平成28年１月28日（木）
　　「神皮23号」第１回編集委員会
日　時：平成28年５月19日（木）
　　「神皮23号」第２回編集委員会

ホームページについては、今までどおり浅井俊弥副会長が中心になって管理されています。

なお、クリニック・医院の診療形態情報をホームページ内で公開されている先生方におかれましては、変更箇所が生じた場合、該当するページを印刷のうえ、変更箇所を明記して、浅井副会長までお知らせいただければ幸いです。